546

三百ヶ條下

一　路次之飛石之事

路次を作る時ハ先飛石を定むる根元也或ハ山躰の景色

或ハ古跡の名地又ハ切たるの人の路次何れも其心に叶

ふやうにすへし第一に飛石を置る根元作る時ハ先石筋を

極め其後に木を植るなり道筋ハよくよく分て撰へしとを

流るゝ之其中へハ出さぬやうさてつきと作りしかる静よりて

さる程より其分にて下すへしなさ石をくハしく面白く作るへし結構

なることなり

二

石隠しの秘の事

石隠ハ四角を嫌ふ中をおしなへて丸き形波のこと下
丸かれ作りたるハ上より丸く見えて中にハ水の流もよふきや
丸く波をとらへ玉子のなりに丸きハあしくおしなへて
なく丸きかたちいつし擬宝ちと石の四角みへしは
よからぬしかし中ハ丸く成又角みて丸きやうにてもへ
よろし前ハうすきを切て見る口伝あり

三

築地の泉ハ五所に在

築地の泉を囲む事五ケ所の中へ入て見て入向の見付
刀掛の場りの見付合て五ケ所之格石橋五ケ所丸に泉を
囲ふあし二ケ所ハ角て二ケ所ハ其之絶意元天然之石
ニ所ともに泉のよきハ格別之築地中泉のよきハ格別
囲ふハあしく

四

せまき築地広き築地ニ在

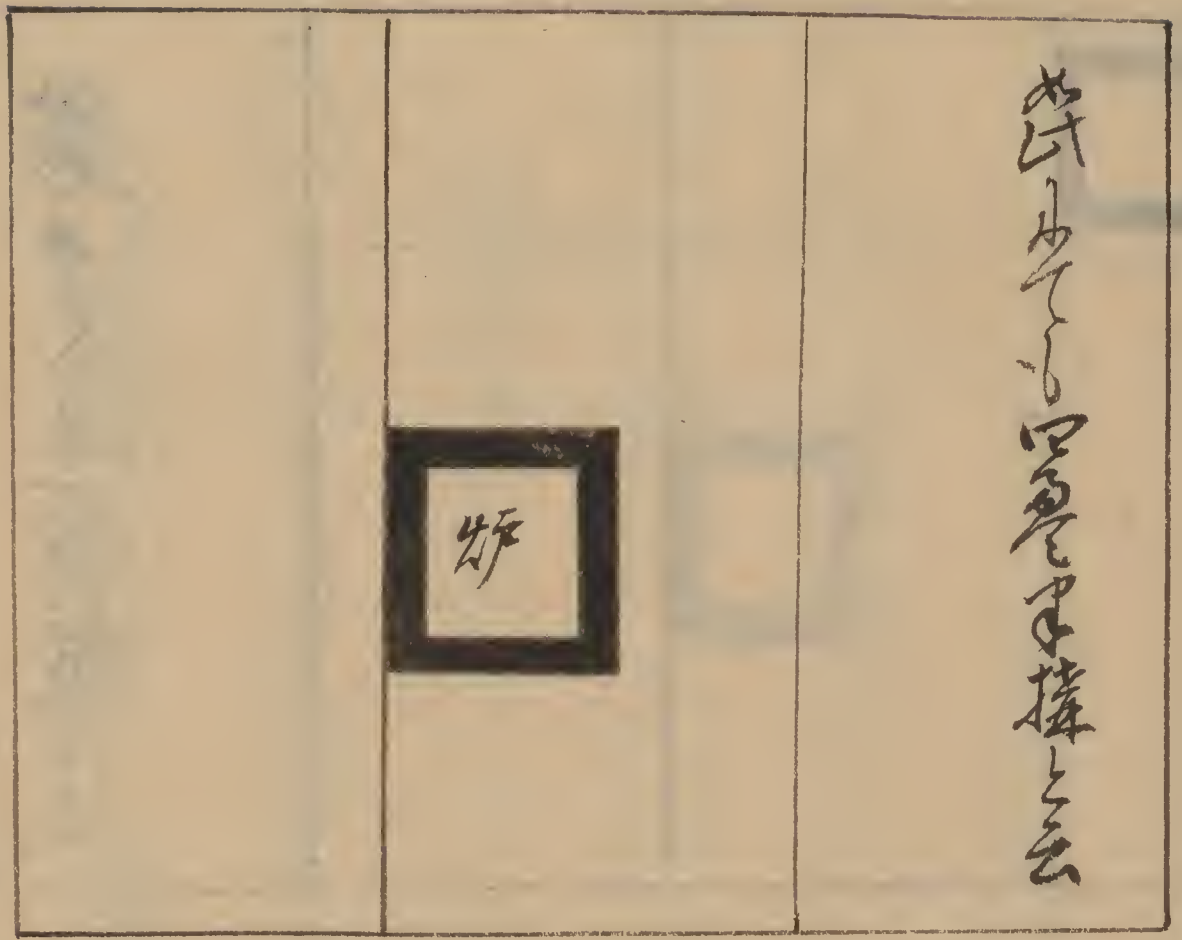
狭き築地ニハ飛石も多て石も狭く石数多きハ狭
き築地石おきハあまたなくして見込もあし広き築
地ニハ石もおく石の石も広くなるべし

五

数寄屋ニハ四角に中ニ台子ニ畳ニ大目出床等ニ而て

自余茶会分別之事

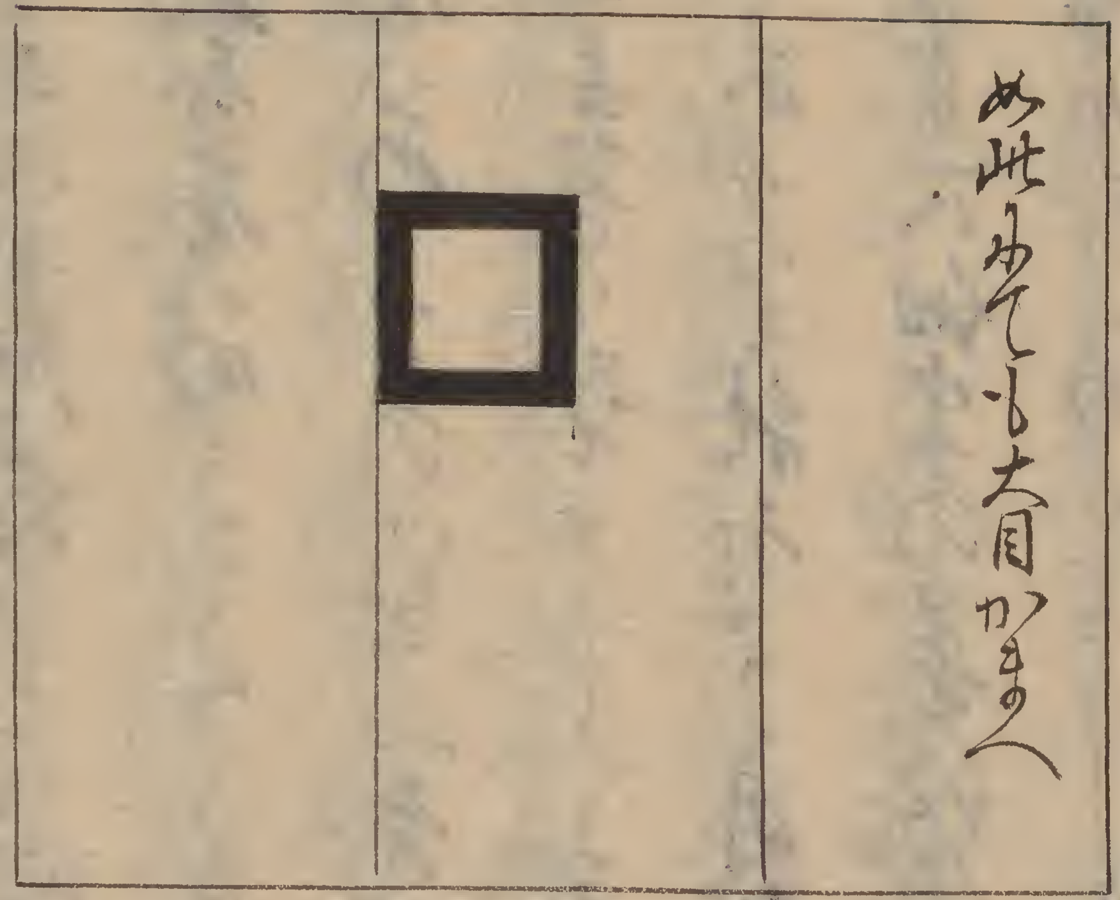
数寄屋ハ東山殿時分ハ八畳敷ともに用候先ハ六畳敷
紹鴎ハ四畳半を用 利休ハ三畳半とハいへとも客ハ居所ハ
三畳なりて八炉入くらし 客三畳 亭主三畳 合せて
三畳半を用又ハ大目此三通の炉ハ切様ニ而自余ハ廣
座敷いつれにても茶会する也四畳半のつもりにて炉を
切る時ハ四畳半切りと云先にて炉切るときハ三畳半
切りと云大目の座にて炉をあけて切るときハ大目
切りと云なり

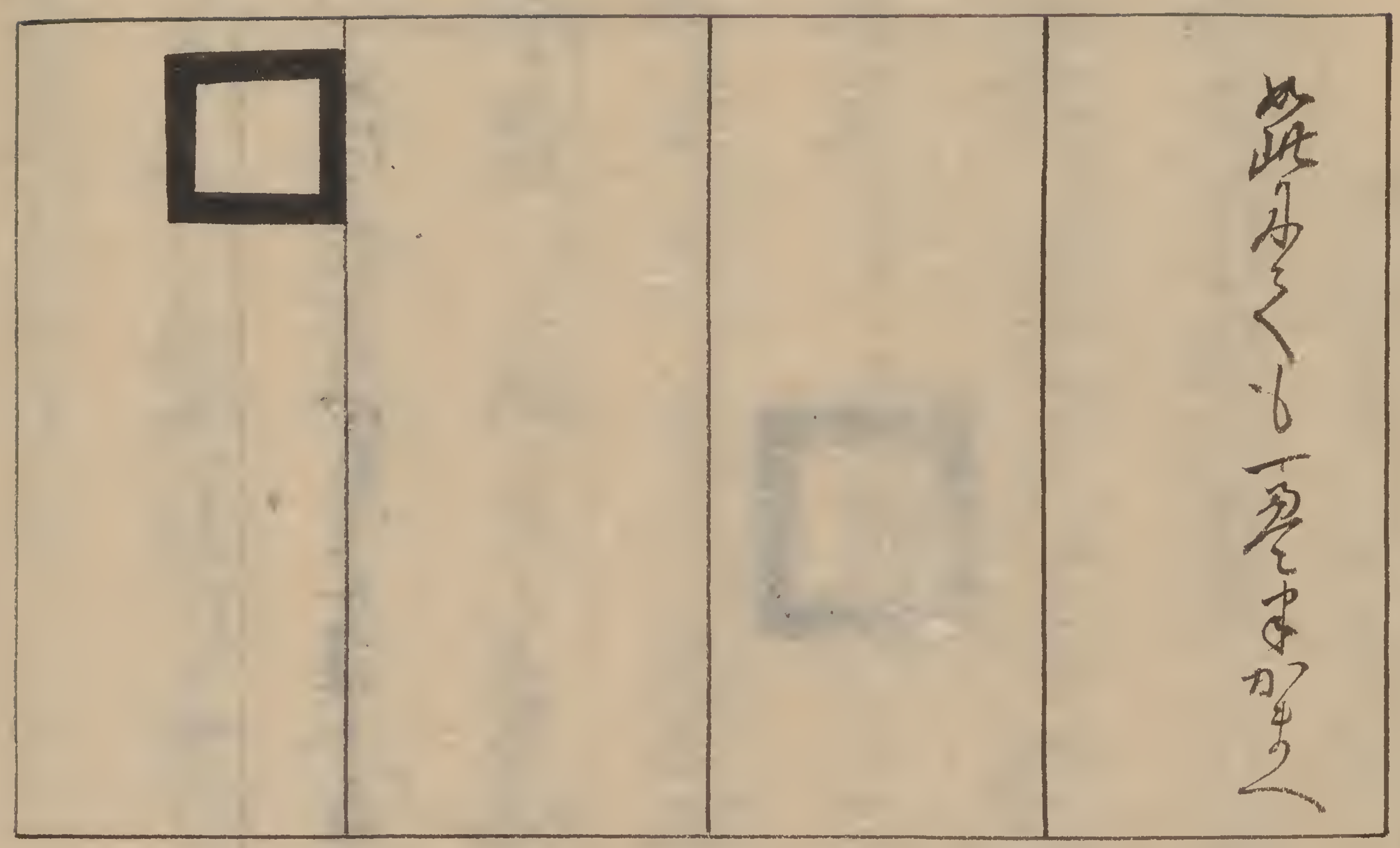


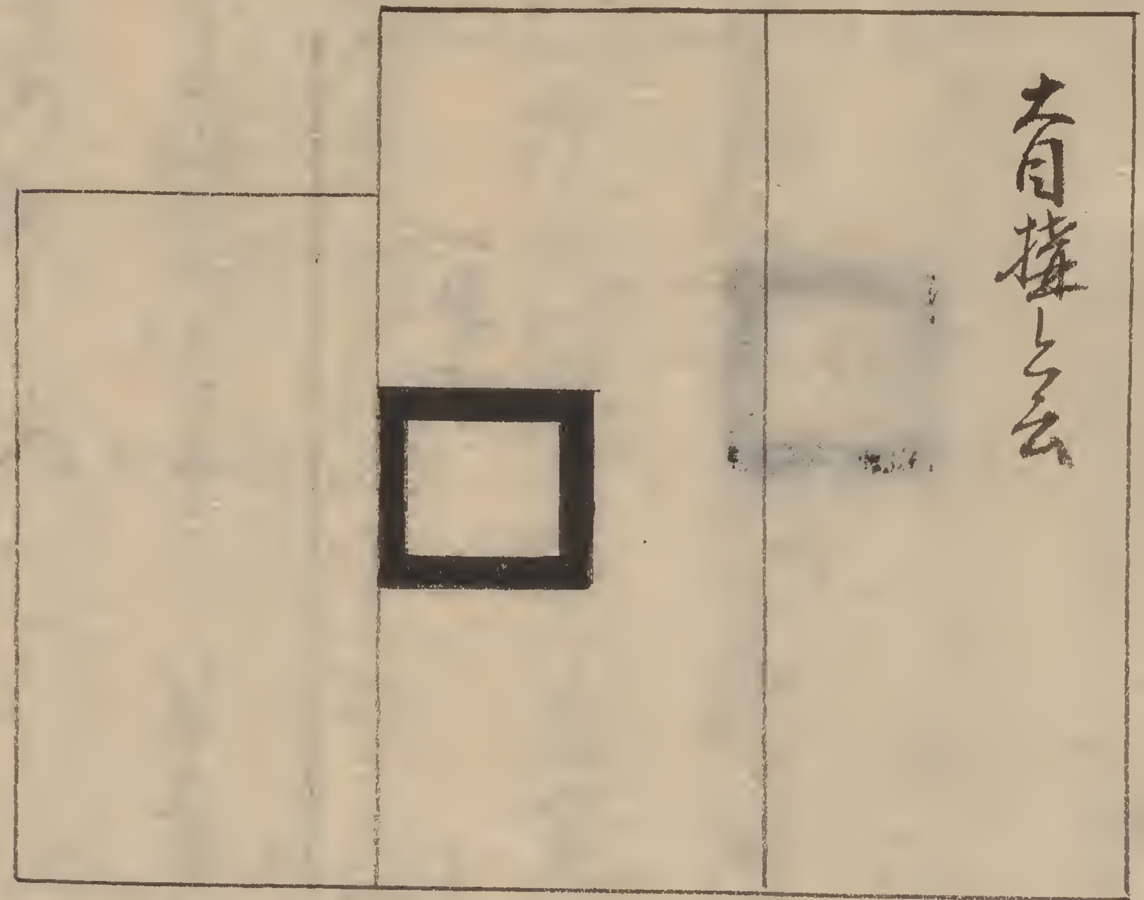
六

一 床かまちの事

床おとしかけかまちハろく成物也用る之掛物乃縁く







和らかもかんなかけ板之数寄屋とくくかゝりたる木へと用ゆへハ
あしく文床地のまわりハ真なり塗壁ならハ草之数寄屋ハ
床地をも用ゆる事広かる事なとハめつらしかるへし

七

数寄屋ハ明るさもくらきもあしき事

数寄屋ハあかりとのかきん寸一之縁し窓もなくあかりを
先も用意すへき障子戸もなく床敷して書目の掛物に
ようくあかりを能取りて用ゆるよしさとハ何とも目あてに
致すことなり又ハ細字の墨跡を読く床前の出まして
離れ目にもかんなかると云しとも是ハ口伝之中也是ハ後又

あかるさ振りて来事ともんせうく読て其所つきあかりも
天ハ八尺七寸或ハ上と定め其折こ所に七寸弐ツ分もハ八分にも
弐ツ分も振其天井次第なり

八

張付の床脇并一間なる物かり分には汀ノ事

書院広座敷の張付ノ床ハ總物ハ張付候てハ必打汀
なり間ハ下にも打又ハ切さしよりも打之又あかりにしく
自由に床に入へあるく振さいうし以總ノ場の宮広棲自
由なる仕方よ小場なとに好なり是ハ大徳寺なとの宮殿
床拙物ハ出て候ときハ七椊とて七寸ほとの椊の振なる本を

きつりまてまあつてゆくおり自由にあるく掛よいつくし
なるなと表具師の弟子の語句あるへし

九

色紙并丸色紙中ふくみの事

丸色紙とハなにゝても同し掛に色紙を付るを中色紙とハ目
の事なり又色紙付るを色紙に大切目小切目と云事なし云
傳一ノ大切目と云ハ色紙のまはりを切る也小切目と云也
中色紙ハ其色紙の表具目通りの方よりこれを丸目に
なるを云丸き色紙と云中より又なるを中目色紙と云其の内
色紙なとハ丸目を用る句ハ中色紙中にても可有之

大目色紙ハ三重台あれハ同しくハ表方よりも此中の本掛よ
丸色紙を用いるより又ハ丸なとこそ用ゆ

十

絵讃并墨跡之事

絵讃のことおの筆ニ出る処ハ可為絵よし事足ハ表具ノ
ことヽ讃を道徳ある人或ハ貴人又ハ公家門跡の讃ゆゑ
絵よりハ讃を主ニ可存事ハ讃の人を以て主として表具
いたす事又讃よりも絵の筆者を主ニ存事ハ貴人の絵を以
表具いたすへし

十一

三幅一対四幅一対五幅一対乃事作法之ハ幅を並ヘ方之事

表具ハ侍者掛之外ハ表具の古経寫なし八幅の時ハ本尊

ての外ハ左右を脇とする也 古筆ハ取て左右する也 五幅對ハ三紀二

瓶も三幅對ハ三紀二瓶も本ハ古人の時ハ五幅三幅ハ

香炉花とあるべし

十二 墨跡表具乃他法寸尺の事

侍者取記事以

十三 押切しと云無掛物の事

是ハ布をもて掛物とするハいかにも時ハ廣くして植ニ

くしのきんるをきて表具をすいて墨輪 布をもち ふいてきるなり

十四 真の臺補絵の事

一文字表具之ハまつさらと云

十五 墨跡の箱の事

昔ハ紙をもさきの本を巻し軸をさきハ紙の上をよりかけし

大きくいふしころのさしを紙にて段箱の蓋面 上を也 寺分

とるもあり 二 下ケ紙ハ蓋をいれしてその真中に付るを始さ 是ハ左上ハ両ニ分のとさハ上ハ下分上ハ二分ニ紙紐ハ一 紙の付紐也

とうぐ身の真中に付るあるも是ハ下りるそてあしきさ之 上

十六 墨跡紙の肉結振の事

可有取上紙べし

十七　墨跡紙の内くゝり寸尺さゝしまゐる事

傳受秘之記し

十八　炭花不風の時心持の事

大かたハ茶湯ありてハ無之事ニ候客衆人ゝ少なく殊の外切炭の
人なとも少なく不風いたし池邉出来すり候時不風いたし候之

一　炭不風のときハ釜をあけ底も以次第よくして灰とま
く組炉中此角なとハさわらぬ様ニ炭のあたりてくつれ
なる不入又ざりなと有て無之炭も土脱のこゝろへつき
付くハ無之枯て炉中こけぬ様ニ之組足り炭ハ格別なり

一　客仕て取あつて亭主ゝ入釜なと上りてもかくハ又立とても
其くあくハ入時亭主底もかく不ハいろゝと無之炭の
重ね出く炭乃扱ひもあるなり

一　花不風の時茶壺ハ出さとゝ其のくゝハつとゝ布巾
刀済しく床の左右備もなき　方ニ無

十九　房掛水打の事

極寒の時ハとも板ハ水打之花入ハもあり

二十　兵の花入なく無之又もなくも無之事

其のくさりもとくとなく書院遠棚ゆハ無之又ハ袋棚小壷

子の上にも垂るゝ下に垂とハ麻の上乃下之総主尤
下に垂ハ凡ならかし切へし

二十一　数寄屋の賞翫の事

賞翫ハ日本にてハ桜を花王と賞し唐にてハ牡丹を花
王と賞し天竺にてハ蓮を花王と云茶湯賞翫花ハ何れ之
こと也何にても賞翫花と定めたる事ハなし柳之類ハ時節花
目立たる時分よし茶湯にて賞翫之花を賞翫花と定るハ之
総て賞翫とて入る時分ハ何の花を加る時ハ賞翫花也とも
二十五日迄一通り用る挿之柳ハ正月十五日迄ハさすのミ賞翫すへし

花ハ当季の初花を賞翫して時分なき挿ハあしく候是ハ猶
時分より早きハ花を賞翫と也時分過ぎたるハ花にハ入ずと云
早しくさゝぬ事なり

二十二　茶湯の花ハ禅文佛法の事

茶湯ハ隠者閑人の寄合にて古仏祖之時節四花四季
との姫ひもゆるし主花と遠ざかる総て宗より挿忘
るとみるし宗へハちかきの為ム語あるへし

二十三　れとハ花文よム稿あるへし

細口の花入にハ一ツ花にてつまりぬ根よハ入る挿之水仙なとの
根よりハのひあがりたる挿ハ下又挿なり梅桔の類もなり

しつらきあり掛ものゝ高さハ並人の高さ三尺一耳にして
床之細口なれハつまき入有しつらひらうき也高目に掛まうき
ハ之人たきハあしきなり

廿四　口広き花入ニ花指あまた

廣口の物ハつまき入有りしたるハあし中にてつゝまやうにメ
まて入よく廣葉なとも水きハもろんて枝に付てむろ
かたきハあし

二十五　茶碗ニツ飾り三年

是ハ数寄屋にてハ二つまでなり書院又ハ居間にハ二つも三つも
三年あり同じ道具二つ三つハ二つまでたきことなれとも茶碗を
かくかへて枝の時ハあまへと思ふも又も棚の入ずハ口
あひたりにても勝手を入てくかたちなり

二十六　座敷に数寄屋道具の事を掛る長居せ年

勿論数寄屋にての事なとや道具にて座敷へ掛るも長床
にかり長居もある之先茶入を書院押と床ハ色紙短冊
を長居もなる事ハ武具なとにても掛物なとにて長
かかる事ハ茶湯をいたす時ハ座敷道具並居ならぬことなる之

二十七　手志らく洞なりき何方にても長居せ年

手燭ハあかりの為 羽箒ハ掃除の為なれとも 茶事ハ定之
つとめし何方ニ置るゝ也 時分のあるとも心得へし
羽ぼうきハ何方ニおくとも置所ニ茶事なり

廿八　落掛の如き茶掛ニ茶時の事
落掛の蓋茶ハ釜掛の上乃掛ニ茶なり 受友をよみ板乃
真中に茶をわきに茶席をもうし

廿九　床ニ硯石菖なとハ古人茶の事
此硯ハ硯箱なるへし 書院なとハ筆架の数を合せ
茶席ニ数並し 料紙茶席をもなるへし 石菖を床ニ柱床
ニ茶席之石菖ハ油煙をと取為なれとも面白
かるへし 菱なと飾なとも茶をもつ為なるへし

三十　塗縁を書院ハよろしからす なとありしき
腰張塗まて也 竹天井なとにも寄らぬ合なり
并縁ハ塗るなとも書院縁ニ替るとも茶書ハ湯ニ家あ
かり床も茶の故塗ぬかちハ二よりかつてしかも故なり
もらすに替る説あれとも定まりなき事ハ何事もあ
らためるやうなきものと改めある故之天井の
ぬうち打替まてし天井打替の数を方にて替乃

臑ぐりとも路ゟ皆乞のたとへと路ゟ心なり是を以て
分別せざれハ炉にも無心なり

三十一　柄のなし火箸二本あるべし

炉風炉ともに柄のある火箸あるべし風炉の柄のなき火箸ハ
炉の火箸也柄も無に二本結し有て火箸うつの方も有べし
切りし扨炉の火箸はおもし柄の火箸なき是を以て二
揃なり又鹿とられ時の長火箸とも云

三十二　炉の用る事ハ佛法の心持あるべし

仏者ハ生住異滅とされる之何とも此心之生ざれハさるんよ
滅く住壊して住せざれハ異変せ
ざる滅せざる之さまれハ炉中も無心なくしてあるや
朝ハ生の時なきまれハさまれハいまだ住して壊まるれ
炉中もいまだよろしくまるる之異変ハ異変の時刻なして折と
ろ字ハ炉中疾ても崩ま之火もするまれハ炉之辨之蓋つりハ
まるく疾ても崩ま之火も三度なる辨之炉中をつくる也
此心なく見る時ハ切なる何なの炉中もつくるなり

三十三　よそ也て見るの円不知足の時の事

なそなく風炉の中不知足の時ハ不知足の大極りさく続

余ひゝてさしつかへなくはなる趣之ゟくるしからす候之を
庭中の異もぬきをあしらふなり

三十四　蔓ニ切かけたる枝ニ心持あり

蔓ニかけて花入の地紋花の拍子もみえてよろしき時ハ
蔓枝を花入ニ引出してなく候ともつり付かけ二三日まて
引出し候事なるへし

三十五　古歳の花付事

古歳の時の花ハ何方からみてもよく見ゆる拍子よろしくよ
くる抱なり子細ハ客人主人ハ何方より見るも花の見所を
かさし上座もん法寄宝る故當も一方へ宝あ雖し去ル何
方からもよく見ゆる拍子ニ入る趣之客人の時風を嫌ふ

三十六　床ニ花入置かさる時茶を掛ヘと所望も有事

茶之その事之由緒ある花矢を初より床ニ置時ハ茶之
之ゆも宝からす所望して床へ上手ニ出し候之挽出し
花入置かさる時ハ掛へも所望ある之大目の角掛なとへ
所望して上ささ候ハあしく宮中銘掛又大目なとへゆるゆる
通掛なとへハ所望して上手にさせて之亭主上手やう花
かさ床へ上手ニ直し宝を移かけて見ゆるなり

三十七　掛物花入床にかざりし時花入鎮紙押之事

掛物花入香炉三種床にかざりし時花入鎮紙押之かざりの時
押さへとりのけて置きて花押へ鎮とつて床に二種押に
も下に水指上に鎮かざりし二種のなく同事になりあ
又床に置花入かざりし時打ちにも鎮を置く時は置ま
掛物と二つならべてあらし此時は掛物に入るとも掛物に
の方のこなしの陰に重くもよき之仕立のなく懐中に
置くともすまし入れ候とも入る

三十八　月夜に掛くる物は大人をとりし事にかやの事

月さしこみて風景面白き時分はあんどんを出しも不苦され
とも標掛の心持よりて月入らずしてよろしき事は大人と
思ひしてよし

三十九　床に掛物かけ又窓に花入かくる事

床に掛物かけ又床の脇地窓の左右のうちに打釘を打
花入をかくる之花入の置き所ならぬ時も設まる
床相によろしく置き所なくて釘を打ちてかくる也
是は掛物との差合のかくる釘之脇よりて長さき花入又は床
まんなかよりも長き花を入る時は右の釘に掛る之

四十　床ニ茶入釜を置合様棚ニ茶入置事

初座ニ掛物并茶入釜を置合掛物をかけ床ニ茶
入釜を置候ならは口紙有へし掛物をかけて茶入は棚ニ置之

四十一　よき物出して人の道具あつかふ事

能物出して人の道具あつかふ時ハ何事も真にあつかふへし
よき茶入茶碗あつかふにも其主の秘蔵之道具
仕立の時も茶入袋の数も多くとりそろへて納へし

四十二　不自由の茶湯の事

不自由なるあひて茶湯いたし候時ハ必ス道具并ニ万
事設して整へたる仕方こそいさゝか其の不自由より
あはれにて必ス何そめつらしき事設て人を饗應する
ものなり是を好とする也

四十三　風呂釜二重釜手取釜なと広き座敷にて茶
を調ふへし右茶も所持あるへし

いかにも広き座敷にても炉の切様も風呂釜かける
大目切之釜をかけ候ハヽ大釜にて掛物
炉の切様右の三色の所持して釜置て茶出る
事又風呂釜なと様々座敷にても大きなる釜広さ

平地へく点前の心を第一と置る様なり

卌四　月の夜会乃事

雪月花之書院の物之次雪年の月夜ハ一入花乃書院

其掛物ハ掛物も掛た事も無して雪月を書院ニ

る心をもちとあるなり

卌五　惣別夜会之事

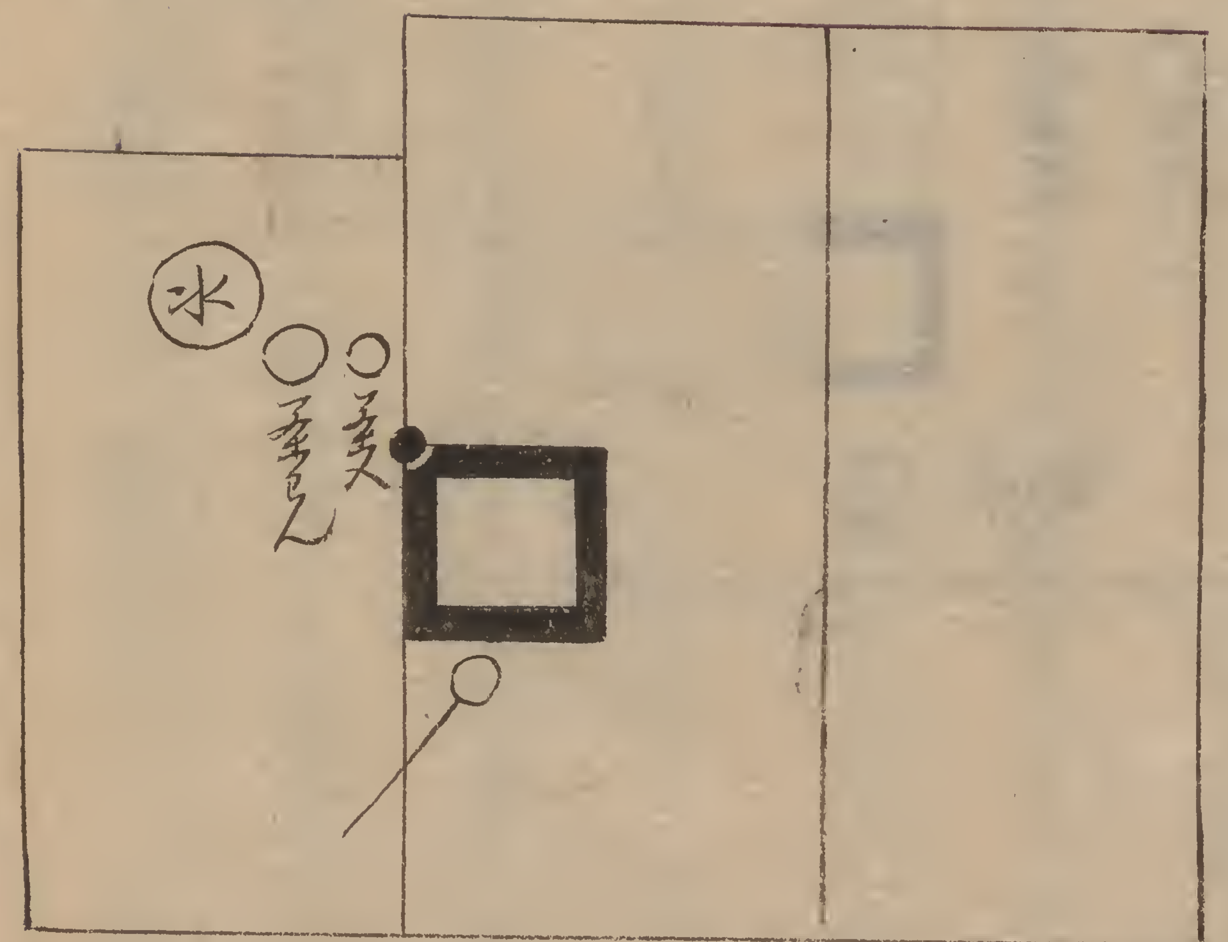
惣而夜会ハ不附の様なれハ後事を忘くハあしき物の

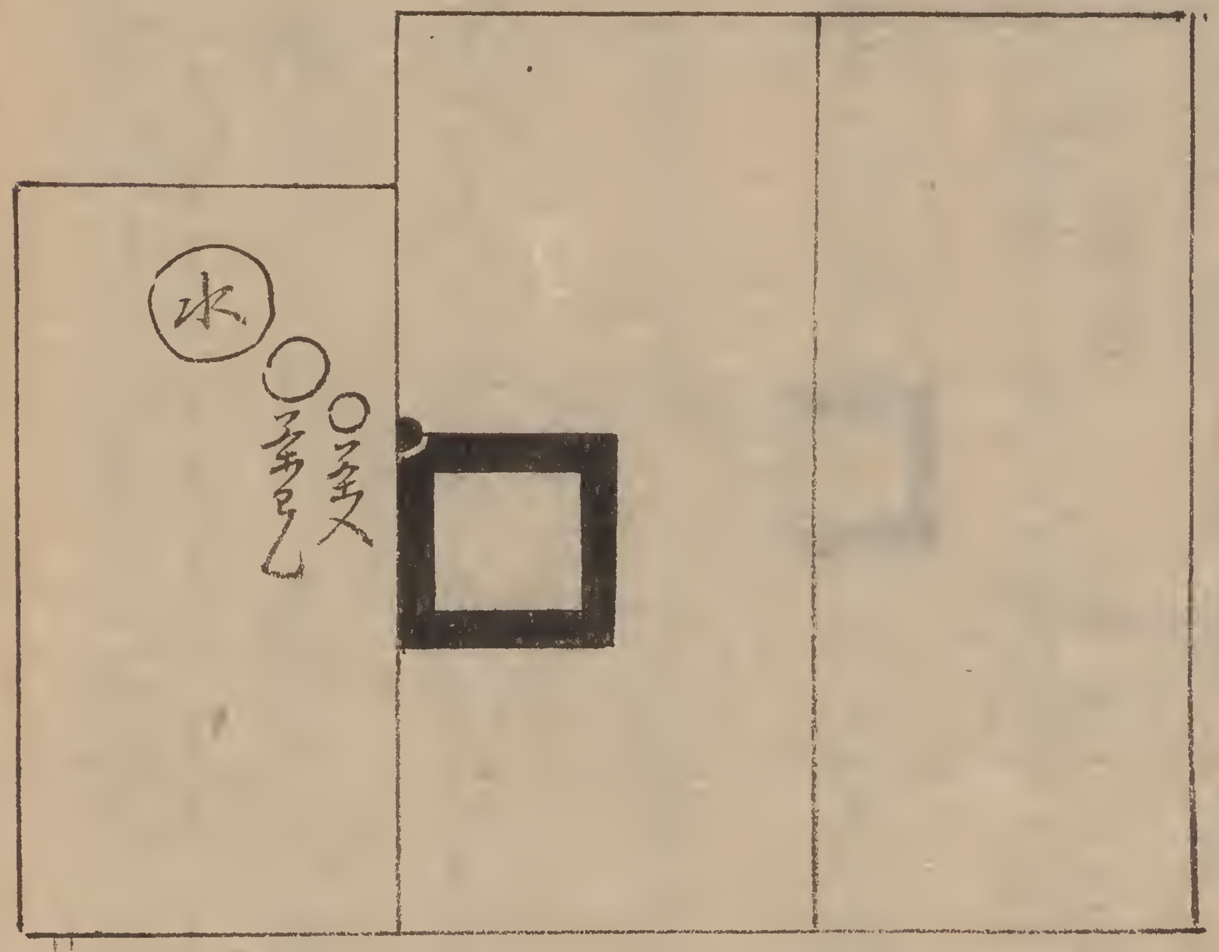
心持之因茲掛物をも不足と此事も不苦茶事も及ひとも

らし此心得ハかく後の具として見合具ハ知る餘之

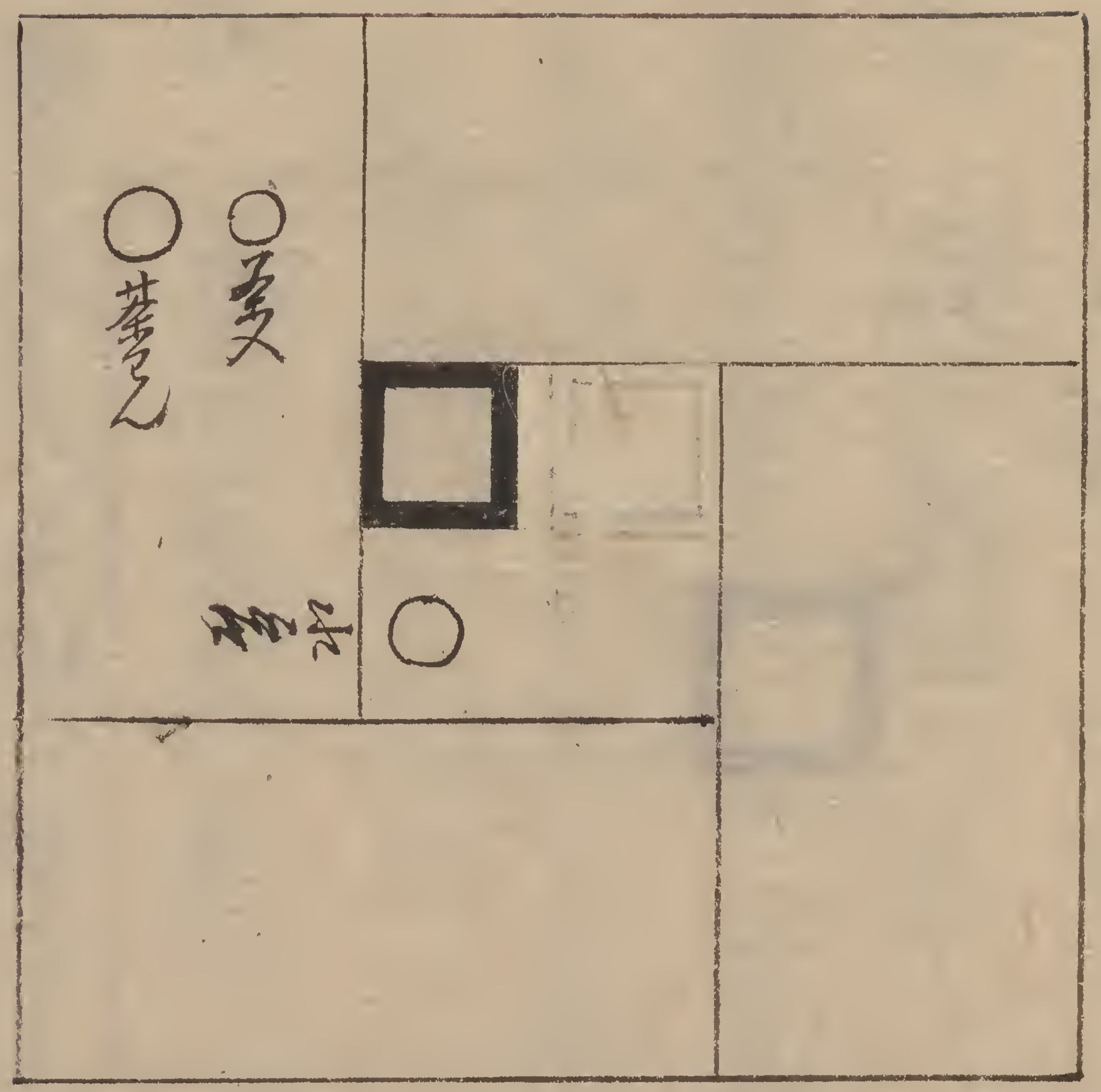
自分ハ茶之ハことハ不入物之後の因の事とみて茶会の会に

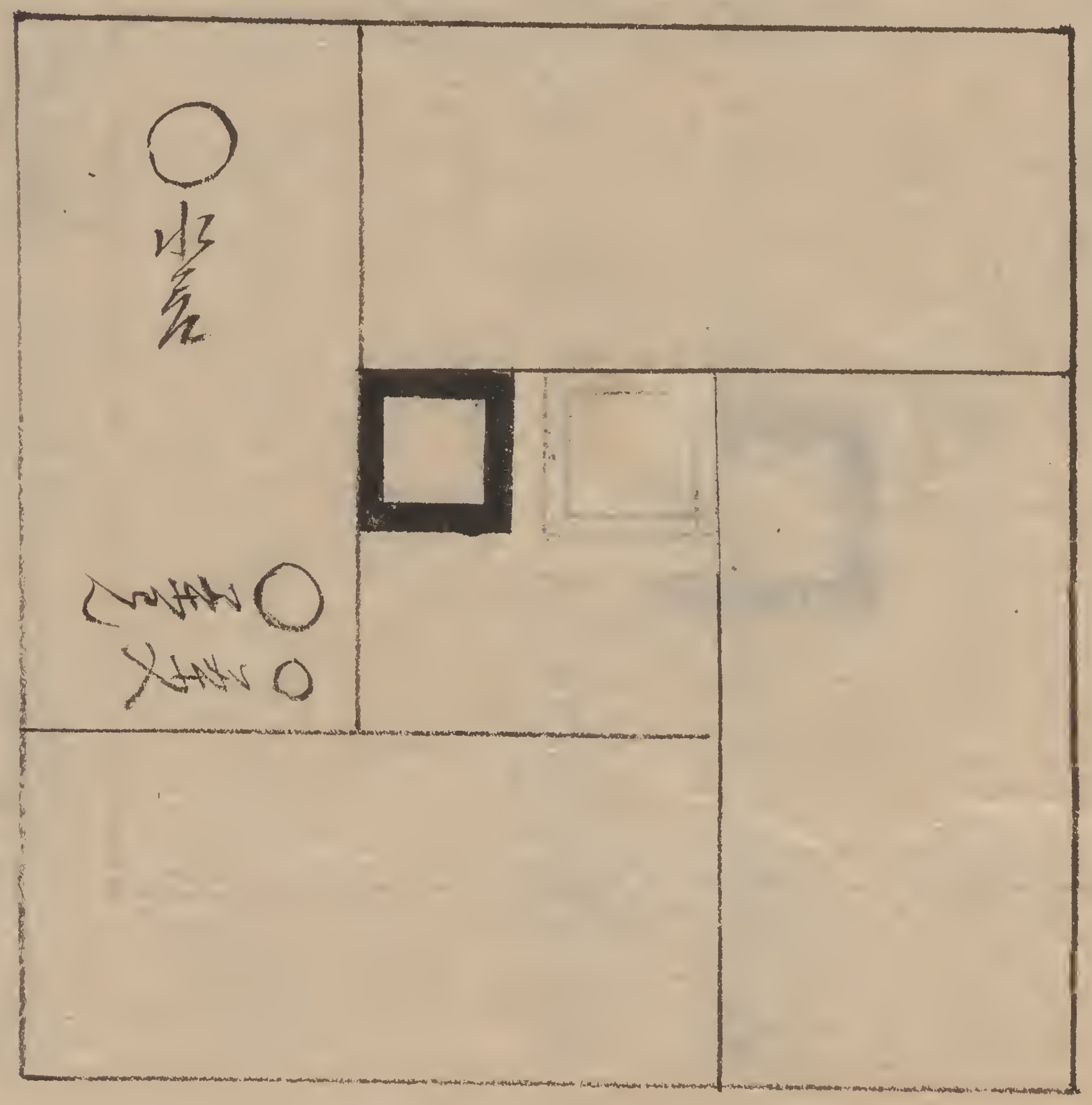
ニ茶心あるし客の御用てもよし





四十六　夜会之時の置合せ之事



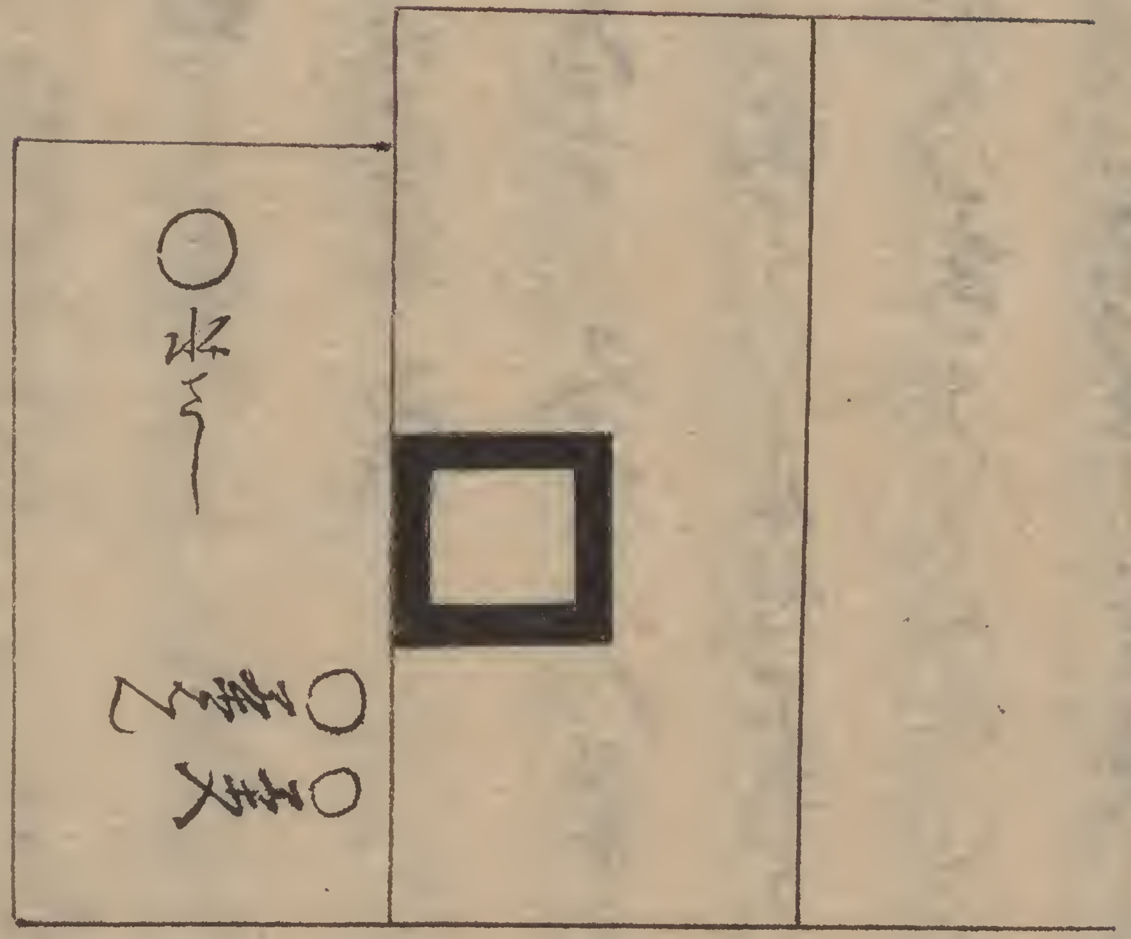


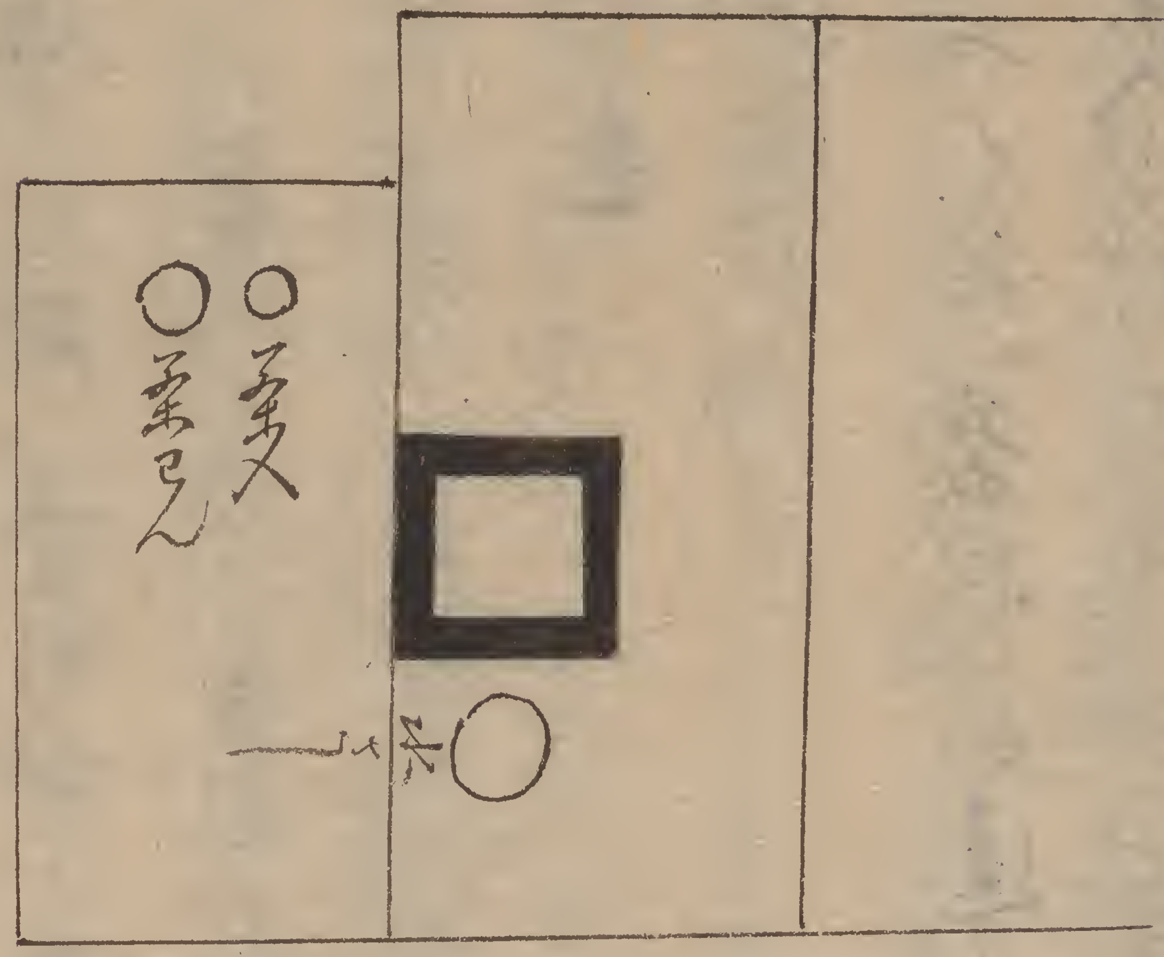
大目なく縄簾釣焼物にて秋会茶壺置合せときハ水指四畳
半の通り真中に置茶入茶碗水指の右に置合並
茶杓ハ前々のとほり炭ハ常の大目の振りに水指の左の方へ
よせ茶入茶碗組合せ手に但ハ常くにてあてさるなり秋
会のときハ四畳半の通りに置合せ候て石組候こと
なり古来別の置様と云ハ炉の右の方切置の真
中に水指茶入茶碗左の方常の水指茶わんに身の
右の様に次第に前へ遠く置合せ跡前々のとほり跡茶杓ハ常の
通り此ときハ大目なしハ水指通りに寄し候ものなりと

すみ〳〵まて大目構にしくとを切る時ハ無用のまゝハ仍ふ
都手前をくもちきまり手燭にしくゑうとこ夜会の
とき八此手前をにもるこそ自然にあれと常にハ彼さま
まるへし

一ある何屋條にて云此手前をハ同つまりの仕安さ客切ニの
会にしくハ囲くもちきまり左もあるとてハ此手前をハい
かにも如此なる手前あれとも彼仍のなくかとしはありまり太
目別の手前を絵。

〇図のことし





四十七　夜会の時茶入のかさり心持の事

夜會のときハ茶入の蓋むさくにうきと又ハ炉ふちに
かくる数乃あやしきこと也後さぬ抱之又茶入おし出之
引出し置なり蓋をとる茶入の後へ置扱茶入
をそれぬ常あれしらハ中是ハ茶入乃置合を残遣ま
ことなり又茶入乃前ニも置

四十八　茶さくニ付茶せんの事

茶筌ハ茶さくニ寄さかひつく抱之茶杓飾遣て
置ときハ茶筌も置直て茶入と引さきそて置之茶杓
縦くに置ハ茶せんもろくに置なり

四十九　袱さするの用とする袱さする事

抱る時ハ貝ハ置合をハ袱用れ置き退ぬ抱之水指と袱と
手れハ先て從ひ茶入茶碗用とするの茶入袱とする手ハ
茶碗まて從ひ用とするの抱之茶入袱として置ニ
置ハ茶筌ハ用とするりて茶入ニ寄さかひ茶入と並ハ
茶筌抱りて袱とするの茶筌に寄さかひて置合也
ゆへニ袱と如用と如れ置き退ぬなり

五十　茶調のとき茶入のしめ服し事

茶を点る時茶さく先茶入抱く茶さくと水指ニ

なをとく入さし出し中拵ひゆくく茶入をおさえ右乃ゝゝ
ゆるくとかくしめる揃なり

五十一　ゆさ盃付むさくの事

揃様ハ盞盃及塗ひ盃なり　竹輪なと目あまし八月の
あうれ塗ひ茶さく出し盃揃之なとく盞盃ハむらろ
九を白ゆして九の底りに者さうひ盃なり

五十二　自在くさりゆく茶立之事

自在くさりハ先茶入茶碗とくさ盃台をさて釜にむか
ひ釜を上さしく上る之上ヶ紙小のさしを右のゝゝゆて

左のゝゝをあとにあてつるのざいに添く扱ようさ加ゝふ
上る之手後むさく盞盃ぬ法まし茶立る之茶茶立
ゆく又もあ茶さきいつし返財ハ一つく立出しに後ふ
さ茶も上ケ茶いつし言茶立て佳立又つる出さるり
左のゝゝをあとく右のゝゝゆて小のさしとるゝ二盃之釜上る
ときハ小のさしにて饒投上ヶ盃扱釜敷紙を出し速
左乃ゆく環を左右のゝゆくつるとを上ケ左
のゆゝつるとを者まし右のくるんをとろし又右にゝゝ及
さゆつるを持左のゝゆて左の環をとろしつるハ備

よの

鎖にてかきを垂之釜掛るときもつるへなはをさなし
く付の座り所につくをくさりにて炉中へおろし
自在ハ釜を上ケをくて右ニて少さけとり左ニて自
在のかきをぬき出し炉の上にて釜をかけかきを垂之釜
をかけ下ケ候ときハ自在とおもふ也但小釜ニてくすき時ハ
自在ニ不及なり

第三　自在つきかきと云事

自在数寄屋ニて用ル所ハ座の天井ニて用時ハ竹ニ数寄屋
のときハ又七八寸ほとも長さ低くして自在のかきを付

扨自在を掛るなり

第四　自在のかき口伝之事

自在ハぐみの木ゑぞの木桑の木梅の木なとよく他是のかき
鍵ハ身木をかきに作りて枝のかきを掛て用之此所より先にて
右かきのかきを掛之又自在のかきハワきへ向かぬ掛之ワきへ向
きへ自在のかきを付るわ是向へむけて掛るなり

第五　茶湯ゆへ手をつく事

茶湯時ハ座ニ手を付候ぬなり手を上にさりてを付
とうても付く掛なり

五十六　不時の茶湯之事

総して茶湯を設まうる之事ハ雪月花の興よりおこる事
客来る節ハきれいの或ハ一種菓子を馳走にして客を
まねきさんの或ハ不時の客来をもてなし茶湯いたし候
たくひあり然共此不時の茶湯ハ茶事用意を不用様候
茶をもてなすと云事を不時の本意と申なり故是又不時の
客と云物之主人の定まることをいさゝか拘なり何とも
さまつと時の興に叶様にいたす之不時の中ハ料理も皆
仮りそめに用る様に掛物を出し候様なることを嫌ふ也之

即時に菓子を様なる料理を用候具なりとも其意に任せ
さて其具を不用に至りにおいても其具の中くあへをいたし
あらためてとらへ成る之或ハ客の人色らへも不時に候し客をとめて
好まれ釜を掛てもてなし是又客をもとめはかる也之或ハ一客ふ
主ハ亭主様相設たる事に成其人を炭設しかもそれらさる之
或ハ不出火不足なるハ其炭を設し絶ら火をもさてとも
かし是を云へと云何事も此品なり

五十七　ちらしの茶湯の事

むかしハ朝茶其茶湯朝夕の中にも客来るを茶を

豆菓子斗出して茶湯ともいたし候是を菓子茶湯と云

五十八　数寄のかくしと云事

数寄ニ十格あるへし　功　兼帯　不時　菓子　前置

夜会　風炉　盆蹴　臺天目　臺子　合て十格也

功ハ何事にも正風雅ニ致まて習事をいたさぬ格ニ有也

兼帯ハ功ニも格さへ又月もすく客を振舞ときも

かやうのときハ正風体ニ定しとも御事といふへし条

の義ニ引替へくいひさまなり

不時ハ前の二条乃通　菓子ハ是又前条ニ出し候通

夜会ハ是又前条ニ出し候通　風呂　盆蹴　臺天目　臺子何も

前ニ通い申ニ付ての火組数寄なるとあるし一を皆数寄云

の格あるの揃て夏ハ宵よりとほしたる火の体をつくるなり

儀にて候しからハ火あつかうる宵よりとほしたる火ハ

前ニ有たる格之給仕人と云てと給仕するとくもて客接

つとめ候へハ右の仕形をつくりて来る客之むかうの時ハ太乃

諸道具ニ而く相まして茶湯いたし道具習ひ格之品も

其の義の格ニ而く先之十格之何事もまとむ格なり

五十九　亭主之申くるしへあしきは時の事

風炉と申ハ上て時ハ客むかひに出て時も亭主へ物を見たると
ゐたり是ニ而風炉ハ上下と知る也風炉ハ中ハ上下三月
乃四月中も利休よりハ上下ハ炉ハおろく松乃ちをおもり

六十　臺あしらいの事

落物の臺ハ三方あつの内又ハ由緒有之し臺有らをも亭主
出し候時ハ先いろきさ天目をおろしとくと臺をよんてく㕝
上の方ニ而乍し金茶をれと臺へ乃ち次の客へ渡しをすり
是あしらいなり
臺ハ七ツ臺とて七ツ有之し是ハ上の臺之是を七ツ臺と云

二寸八中臺十足を百足のと云
三寸八十三足を梅萼といふ
右むつて梅萼二寸ヒ廿三足を尼の像臺と云天王寺屋宗伯
と云者渡唐して七臺をもちいて比十三足を渡さを
持来尼の像ハ是後いろしたる数尼の像臺と云

上臺寸法

惣高さ弐寸弐分内ニつまる高寸三分是の高さ七分
くのさし渡し壱寸弐分中ニつまりし
はつきさの法さし渡弐寸三分半

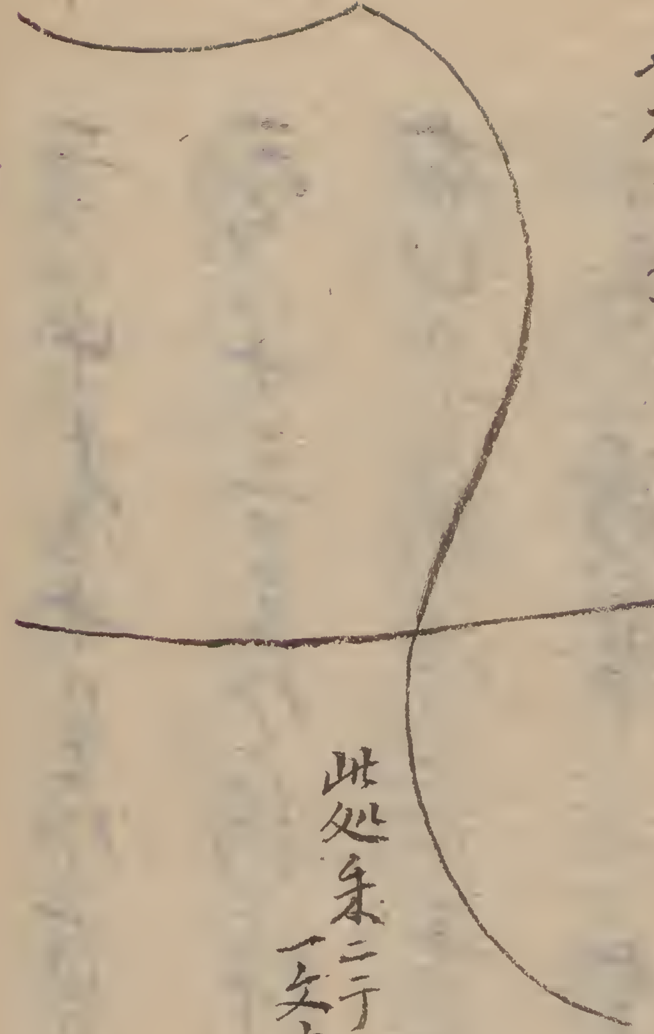
同しくの茶碗なともりなと

同しくのこしへゆくく茶碗なとな

是もの(こ)さしにて茶碗なと水さし渡し茶碗なと

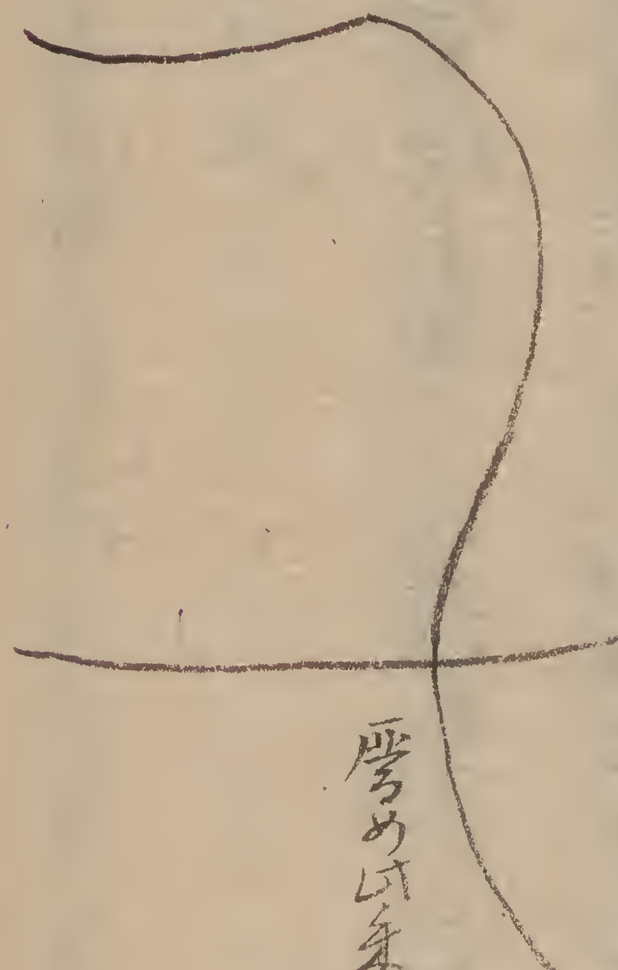
七臺

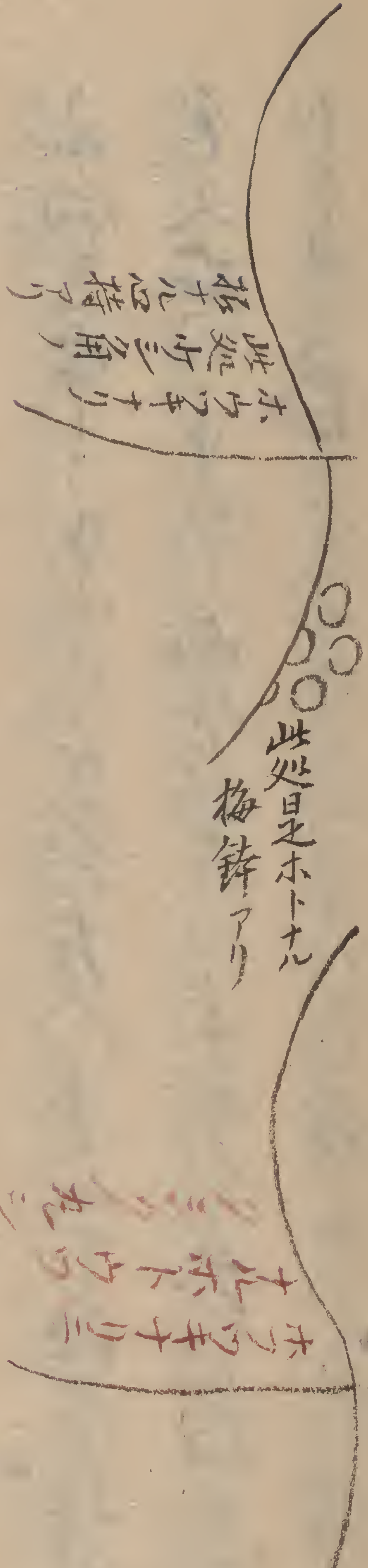
塗ハイチここ黒塗ニ
シンチウ フクリン
ヤスリメアリ



百足臺

黒塗ニ而能ゝ見レハ イチここノ根ニ
見エル シンチウノフクリンヤスリメアリ





六十一 水さしを引切と蓋合せる事

柄の上ニ茶入をと可盡時ふ水指可盡ニて上ニ向

事ハ水さし蓋なるもさしの口されに引切添へく盡かるの

六十二 茶の茶の事

濃茶ハ茶之儀薄茶ハ真草也是濃茶ハ吸茶ゆへ口をも

吸とふく加減をもとしてく茶を次と浚もと是茶之

盆天目のうちに茶ハ跡に一服飲して其上にてくつろん
其上にて茶入を出して拝見所望する事真なり

六十三　墨跡の外題拝見の時の事

墨跡の外題ハ床より取おろし時ハ客ちかく寄て拝見すへし
又とく外題をもよく/\見て取扱いよし後に亭主あいさつする也
其時亭主墨跡を我前の方に直して客へよく/\拝
見向を直しよく/\見て客右へ少しよせて後を持出し客
見て又右の方へよせて向を持左のかたへよく見て亭主へ向
しへ又客へ渡す時字配を我前へして渡す也

のうち床懸物にて見る時ハ掛物のまゝにて見る也此時亭主掛け
おきてみんとする物掛物の外ハ茶入はしめ出して外題勝ハ
外題をとりてよく/\見て其中之の内に亭主掛物
を飾るあるましくとも先ハ亭主掛物のあいしらい
もみて又取るに付て墨跡様をまちそこあしらいにては
らさるなり

六十四　徳名真筆の添付紙の事

徳名真筆の添付紙ハ前ニ茶入墨跡の筆ハ添付紙と
同年之茶立を致しまして其中に付る茶入にて其中に

いつも時ハ蓋残して弦すりをくつくりしかと之

六十五　よそ出く茶立る時之事

餘所ニ出て茶立て時先ん座敷之不見出して右勝ノ左
勝ニ空置中ノまん大日本とうん弁ひて座敷ニ見出之極立
釜ハ木之丈の茶を組合立て我しも不什置まく
出て立る揃之ニ茶成候さしつとさの三つ茶なも
極之立ていより道具あつかいともに真ニあつかい茶碗
手ニも右ニ添く仙之あつかい茶入和物出ても右の先に
て左あつかふ心持ニ弦事ハ心を付揃ふなり

六十六　茶筋の時分之事

茶筋時分ハ也つしハつひるすと壺ヌ一ちすして八後さる所
と前く茶筋を差より茶碗つと取あらく茶筋中ニ
大う之柚の色乃付く時分ニ茶筋とぬう之見ども壺いろ
も後く表ハおうし壺と茶筋取之前く茶筋いつもと之

六十七　手前之式し極の事

弦藝とも仁五人の生れ付ニ出てさかしく仁名之極也
茶も手通ニ出く手前人つとみくく遠之立ちし極ハ手前
あしき所を立さぬ揃之ニ内ニ出て身一あつきさ処を衛之

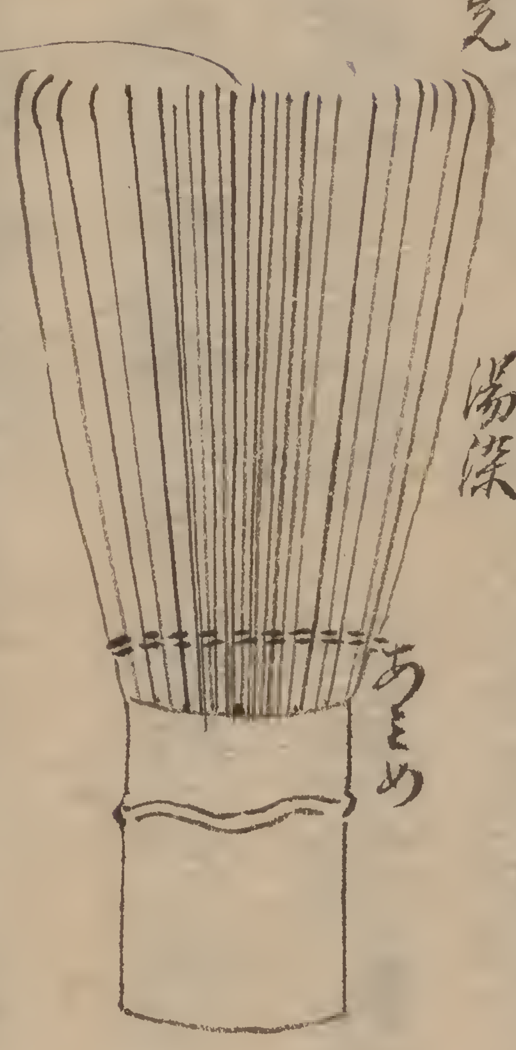
にて事し無拘之趣候らくにはつまぬ根と申し無拘なり
標を専らとせハ仏もなくにねりを細めし根本ろ
くれ候とくて枝葉自ら衰ふる拘るなと

六十八　茶巾茶碗の大さ之事

茶碗の大小によりて茶碗の内に無能もありて寸法に
制度を無能もありて茶巾の寸ほどみ茶筌に続きた其
こそんにはたを無くし茶筌掬笑茶碗ハ付ぬ振りにもある物
あり又茶せんの皮目湯深き前へ出づるぬ振りにあり
定るならぬ也

六十九　茶せん寸法之事

茶筌寸法長さ三寸八分湯深さ寸六分あみめより三寸
取り節より三寸穂ハ百本有る程やうく細（すう）ハ剤ハ其
ゟハ其ぬ拘之ならん勘四郎河内の高山勘之丞
和州高山乃主宗砌附分乃主にゆくく天下一とあり



七十　ちいさく寸法の事

ちいさくなりとも寸法あるへし宗賞好の柄杓ハ柄をかたく
して月形ちいさく成しらひもちいさくいふ也

七十一　座敷ちいさく香ちいさく焼法の事

数寄屋なとのこと之昔ハ名香上々香なとをは銀器
まてしも香たきつり香炉を用て香ハちいさくいふて立
香たき青磁なとの香炉ハかはらけひらく未成に拵なり
成とも座敷よりハ香炉なくしても客を入しく
亭主出て一をきてまつ炭の前にて不足して香利

中座出て香炉出しを据不足をまつ之亭主出て
とき三ツ足の香炉前まへ之ハ客の方へ一ツ足をむけ
中にハ客僧へ一ツ足を向にして香を利させて次の客へ
渡させ時亭主へ一ツ足を次の客へ向て出しハ亭主へ
返させ時も又ツ足亭主乃方へしてひ返し中にハ足利据之
此時亭主よりも客へ香不足しく利させもあり
亭時ハ竹の香筯を添て紙を宮おりなどのを出させ
香筯火箸ハ香盆なとをとも置き此ちらね拵出して不
中にハ客も香をつきにし中にハ一ハ焼つて懐中なとても

あるひ又亭主の前まてたゝきかへし紙ふくさを亭主へ返
さしてもよろし拭払候亭主へ返しさしと存ハ成先拭へ
成とも香炉亭主ゟ上中させらるゝ物也右時ハ香ゟ
も香炉自ら濃ふくさ出る故炭茶之成とも又炭を
て成とも茶受して香炉をつん持ふまさるなり

七十二　貴人ゟ御伴の事

貴人ゟ御伴のときハふくさ新しくて掛なをしあるへ
懐中致させ事ハ新しき鼻紙なとも封して懐中
まいる事ハ人の用ふさる物之扇子勿論させしめて貴人へ
何そよつて時扇子ふのを出させるなり
刀掛無刀掛ゟハ無用にて下ゟ置を置之ニ置候ハ紙を
志きて置之置りてもよとも刀掛ゟ置をを置以之ハさなふ
又合を置るゝてゝ置之懐掛ゟもさし置以之掛れ
とも是非ニし置ゟ掛にゟとみとしゟて懐掛のよし
あつまりしころの居る拘なり

七十三　拝領の道具初る成仕候時分の事

拝領の道具ハふく成仕候やうなる法ハ無し掛れ事
重拝領の道具ハ主としてもその道具ハまつりこゝふ

柄をさし持ち用茶入掛紙なくハ茶碗ハ茶入より柄をさ
しと用茶碗掛紙あらハ茶入柄をさし用茶入出ても茶
碗出ても茶筅ハ柄よりかゝる是ハ一通くさく掛紙の底
貝と土器にもおなしきれ　是専なり

七十四　貴人中入の時分の事
貴人中入の時貴人ハ外より門迄も送りて出る中くゞり
もなく出て庭後中にて又を相待迄さし時ハ待合にても
久敷待ときハさし故に送迄送り出四〈入中始ていさ
を狭庭緒紛りなくいとよりの挨拶不応対之茶を

三出にても茶立口の外にも左にある居中に極まる段
しかるなり

七十五　台子の事殊の外秘事にて口伝有る事あるき
此事を言ひ尽すハ利休迄至りての又いはれぬの事
多くもかうる時と云説もあまた云も紹鴎迄えなきに
出て事あるハ尤又用ひし　東山殿の御時分より
に古来ハ台子を其より紹鴎台子をつめ申候
茶なとても東山殿より多く結構になして利休台子
をつめなり紹鴎ハ台子をハつかひの五種なる六

台子手前の仕付とさしてこゝに請は物あまたんと
なり棚本よりあとも印るしたるなと用仕付るへし
七十六　座敷せはき時は茶具柚先へあくる事もあるに
下座の時は地わきにあけて置事もあり下座よりの
上座の時は地先へ茶具あくる事も有へしなり
七十七　御茶の茶入事
御茶過く立る茶は台天目なり結る茶具あらは
茶入をし拭て其後さまにて取あけさき物にさある拭て
茶わんはあしらいて習ありあしらい義は先出あるにもある

目にて色拭て志ゆていゑ其儘しりくあり結ひ物
おもてと仕立物之名物の茶碗は湯かへりてあ
しらさ拭落して三ツ組ゆと内意の時は天目とたの
手の内其のと右のてにて茶をくみ湯を又茶湯
ひろし天目ぬきて又左の手の内又天目のと茶入又
茶入ありにを茶杓茶入下ゝ茶碗てつゝ茶たてるひ
茶入あけし又湯をと又茶たて立拭茶碗ぬきて出す之
なと内意ゆくなくとともわきよりも左指の様拭
力ゆし時名物の茶碗なは右の手にゆしてたてるさる也

七十八　茶入の蓋乃事

茶入の蓋むかしハ木蓋を用又象牙も杏と用今ハ
木目之昔ハ紙さし茶入中ハ象牙のふたさを用次茶入
中ハも蓋を用ル利休より紙さし茶入中ハ蓋の様相
小かつきなどへしきてまつてよきを用次茶入小ハ蓋
ふたさ象牙ハ中くも其無しを用ひハおもしろくて何茶入
中くも其ふたを用ル事むかしハ象牙ハ中も同法
無しもあり同じ無し茶入蓋ハあとのまてに返し
て其之趣むかしハ返しゝ元利休より思まゝなれ

なしとく其まゝ二重之内よりも遠州ニ成てハとりしくと
さあこまかにして法を好まて石州ニ成てハ無類よき
めこゝに中を好まで遠州ハ其恙を二重ににふきさゝうく
らくおし入らる

七十九　茶入ふくろの事

むかしハ唐物中ハ古金襴ハ和物中ハかんとう純子乃
類を用利休より布ハ唐物ニ成てハ袋を揃くかんとう
純子の類を用和物ニ成てハ古金襴の類を用ゆへく
袋をおほくもちたり

一 袋物ハ紙茶入ニもさきニ布ニも布とぬひとみ
斗すとも先まを云ふ也切投ニ付てあてたつ之底ハ底也て
先より出来るハ云ふ一も又茶入ハ也とる云ふ一の方ゟも出合
也もいへは本手もあるへし其の寸法も紙底のことより
ふくのつくりよきところあり

八十 茶入の緒の事

茶入の口の幅を長さまて緒のことさる茶入惣体ニ意
し極しへきことあり

八十一 茶壺茶入等の緒の事

長緒ハ袋の口の幅ニ云ふ長さまでとめの緒も紙ハかさね
むすひ出して二重しきよをとむるなり

八十二 壺の袋云ふあるへし

壺の袋真行草云ふあり真ハ廣東純子の乾長緒之
行ハあさきにても本縒出ても裏付中荒の抵ニ云ふ也
出たニ緒をあはし中荒の平付の面ちに緒ひし
あり草ハ麻也ても本縒也ても包之ハ出して壺の口の
さ切口とめ口切なとして其後壺之袋ハ袋ニ壺あり
おの口切茶を先出してあり其ハ口あつかいあるへしあり

八十三　万事諸道具名物の事

数寄道具何によらす名物ならしと云ゝの名物なとゝて
有事なり

八十四　茶入をはくあるさ掛乃事

もん同帯の数ハ茶入袋の数ほとあるぬ掛之茶会には
用ゆハ茶入袋の数ほとも用緒ま元茶名物を掛取いろ
つゝとの緒を用と定し名物にて茶を若出之胡数寄客と
に来的にくくさき時ハ釜のろくもつこもりんてみ孫
ありまてあるもと在時ハワさへさし茶ゆゑ之在拓の時
ハ茶入にハあるぬ掛之子細もあるり此為なまハいつろ
にも成ると用の定る名物よ用ゆる茶入ハあるぬ掛なり

八十五　茶乃茶入袋の事

数寄道具の内にて利休云ハ出し緒の道具なり
用ゆ壷茶入ハ釜ア茶碗茶入也へし右云ハなり此何つぬハ此を
さ掛り茶ハ緒の道具に極め面倍にも茶之子細ハ茶湯
ハ茶をさまたけとなり緒まてハ茶に無してハあるぬ掛之
茶をつめ斗身一のこゝろまてハ茶ハ蓋本にて入て置之
本茶ハ道成の仕なり釜ハ一度の亭主なまてハ亭主

の代りにも又客の代りにもなる物之儀也ハ公家ハ貴一乃
禅乃在真之墨跡ハ哉　掛なれハ其又其一の掛之分前
外にハ何事もなるまじ茶入ハ茶ともとき掛ぬまじハ其
又茶湯に於て主ときは掛なり茶入ハなすくさき几掛花ハめ
きしめ清浄にまる掛なり其又其一の掛之如くべし
きひ掛於茶湯の心をもちておこりとさらしく一座の志
らを合る物之於てらくべき禅の在真に用絶右之禅
の在真ハ何も禅の座に至合をもちうこときぬ掛なり
此外の在真ハ禅にて用まじハ禅にかなり用に用まじハ用

なりさるなるべし

八十六　一流の貴子乃事

右之人ハヶ條にかく以之ハ三百ヶ條ある條にかく伝受なり
此なりさる數なり

八十七　一流之伝之事

其又ヶ條にかく以之ハ三百ヶ條と之派一通りハ茶湯成掛
なりし一通りの貴子なり

八十八　真の茶乃事

真の茶湯ハうらとて茶之茶ハこひ茶之まぬ茶ハ一人

一段つゝ之ハ上前ニ書とも略さるゝと申て是ら書子の
時とくと合点まて(し)沈香ハ一段おくりの也ところ略義
なりノ上前も段のきんも肝要なりしく上前ハ次なり

八十九　墨跡掛様の事

掛物懸をくるくると巻抱出来前の巻のまゝ垂巻懸を
脇子の方へ文字の方へ付付けて扱よる之上の
一文字をおろかなる風帯をおろし爪をとも垂し掛竿ニ
紙をて扱左の足より来へ下をあるる絶れ左上宮の座
付よりも右の足をもあかるとかく脇子の方の足と

先へよる懸物の巻を左の袖を左の手にかけ持竿さげおつゝ
左を垂し来よりさがりとどき脇子の方の足より左を出
しさりて事之巻時ハ下乃一文字まで巻てかけ
竿にてさげし来前の巻ニ垂とくと巻込て脇子へ
持入るなり

九十　紹鷗の茶湯

紹鷗の茶湯ハ壱尺四寸のいろりにて合点あるへき事
紹鷗の茶湯めされ候よいへとも壱尺八寸のいろりをつめて
壱尺四寸ニ被遊候ニ而いろりと難儀にて迷惑なること
もなく世ニ用来なるとも今ハ数寄切茶是にて分別

あるへきことなり

九十一　墨跡表具切るとき抔の事

墨跡表具ハ大将軍之人の表装と次分別すへし　天子将軍
公家武家ともに小金襴紙子の類を用出家の表ハ隠
又ハ紙のたくひ偖又その数を用ゆへしたゝし僧俗ともに人
乃官位を考へ(三具足)をつくる掛なり

九十二　同紋のこと御紋あるへし

紋のこと御紋あるへし偖又その墨跡のハ魚鳥ある木の紋なるへし
表具ハ隣々よろし　勅筆のときハ雲龍の類菊桐等

の紋を用ゆへし又上の一文字に紋三つなとき下の一文字に
も三つあるへしハ此ことあるへし数ある下に用ゆるハ左右
ともに紋中に付よし右の中ハ紋すへかわる抔にまたるハ
あしく抔のことき紋の中ハ御紋なるへしなり

九十三　御成のときに表装三ふく一対の事

表具の三幅一対ハ中を真の表具の表補絵なるハ左右ハ行の品
台補絵にまたるなり

九十四　御書院三幅一対の事

表具右の通なるハ奥の書院のハ中を行の表補絵なり

右ハ茶の幢補にもまる之也絵も同し絵同し茶を不掛振ル
気を付る也

九十五　一ツ羽の事

一ツ羽ハまゝ風炉ニ用　の内二ツ羽ゆく也ぬ也ハ
一ツ羽を用炉ニハ不用

九十六　名物の道具不置乃数寄之事

名物の道具持く数寄ハことに也ハ是程の道具不用
拘之候とてハ丸の茶入不持ゟハ又丸との茶入ハ不持也
おしきを井戸の茶碗不持ゟハ初よ井戸茶碗所持
至ゟしきを右衛の起出しゆくハ客も名物もとうらし

ふとあるを主風不持の名物乃ハ扁又ゟとの似ゟるを
不持也ゟしきを又名物の道具只物の時ハいく度もい
ゟるへし

九十七　墨跡並流れ遠の事

墨跡並流ヶ下ハ我ゟ名の方備ての方へ向くをゟれ也
又出し不の方ゟり出しハ墨跡をゟハ右の方へ
向く也と汀遠と云主客の備て程ゟり墨跡の客
ハ乃向ても備ての方へ向くゟり也茶あるゟく之へも打
右振ともくゟしゆくはゟ也之

九十八　中次茶紙の事

中次に茶紙用ること何も由緒ある之中次のこと之者の中次
ハ茶用之由緒の中次柳とあらす亜とときハ茶紙を用る
なり寸法は紙ハ中次の総をとりとり丈を三寸ほと折返し一寸
包ミて上ハ四方ニたゝミ四ツ折ニして用之茶紙の時ハ折目
と我茶のかことと右のかさへいたしかそて上々く但右様との
ときハ折めを我か左と茶と之へむきてく茶なり

九十九　墨跡墨紙の事

墨又寸法なとし之此墨紙表具師のいたしきとにあしきて
印木の人表具好ヤ什ノ人ハ墨紙をいたしまし之まれなる人は
石君好の表具なとハ石黄紙墨紙古の墨紙ハ別にいたして
重ね申候りかくなりといたし者にハ紙ハ代をの墨紙を用亜
掛なり寸法は紙ハ墨跡表具の古紙寸法をと紙三寸ほと折
掛風常にたゝみなるとなり四方ハ内へかさねて一巾ほとたゝて
表紙本のこさハ中ニ折まを三寸ほと折又三寸ほと加へ折目の
本を内へたたみこと亜なり

百　珠光

此三人へとともに玉本つく本の紙向なとくなり

珠光ハ引拙紹鴎の心之事

見わたせハ花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕暮

右の心を用ゆ是則さひたる辞なとも専に用之利休茶也

引拙

淋しさハその色としもなかりけり真木立山の秋の夕暮

右則是も辞なり織部好く引拙にもとつく

紹鴎ハ

むら雨の露もまたひぬまきの葉に霧立のほる秋の夕暮

右則まことにあきをそへてさえやかなる辞なり是安好

右の紹鴎ハ本に侍く之茶湯の根本之如是ハ何も

宗匠にて承つく愛なるに　後世の弟子たるもの

此三体を常にして工夫専要なり

嘉永二酉年夏日写之　原本浅井平楽庵所持

同年六月中旬倉田氏蔵本借得校合了